イタリアルネサンスの横向美人画

国　分　義　司

三たび訪ねてやっと中に入れたのは，この美術館が初めてであった。しかも一人の女性の横顔像を見るためにこれ程執着したことも久しくなかった。門から玄関までの，湖に面した長い並木道を歩く間も気もそぞろであった。春から初秋にかけての週末しか開館しないこの美術館は，まるで気粉れな来訪者の入館を拒んでいるかのようであった。しかし，ここルガーノの街と自然は幾度も招き寄せ，その度に湖の濃い深い色が旅人の心を慰めてくれた。その水の青さは空にまで反射して，ここの空はいつも澄んでいた。酒もあり花も咲いていた。その間，かの横向の美人はいつの間にかまだ見ぬ恋人に変っていた。

スイスのルガーノ湖畔のティッセン美術館にあるギルランディオの横向肖像画は[①]，この館の奥まった部屋のひとつに，さも大切そうに置かれていた。一見して，絵を見たというより，絵のモデルのジョバンナ，トルナブオーニ嬢にいきなり出くわしたような気分になった。写真で見た時には，背景の本や宝石や梁から垂れ下がる珠数玉などが平板で邪魔に見え，髪や衣服も，まるで陶製の人形みたいに固い感じがし，全体に貴族的な冷たさが漂っていて魅力に乏しかった。実物を見ると，この印象は逆転した。それぞれの物は距離感を作り，憂を秘め，まるでさしせまった運命と対峙しているかの如く，もの静かに立っているこの女性の肌の柔らかさや息づかいが感じられる。すっと伸びた細い首すじに接唇したい衝動を辛うじて押えるが，心の動揺は続いて止まない。

メデチ家の外戚，富豪トルナブオーニ家に嫁し，二十才でこの世を去った薄命の美人と彼女の運命に憧れたり，共感したりしつつこの作品に向った訳ではない。ふとした事からルネサンス期のイタリアで描かれた横向の美人肖像画を鑑賞するようになり，いつしか，この作品に向った次第である。

日本だけでなく，当地でもギルランディオを高く評価する批評家はもともと少なく，バザァリーの「美術家列伝」にも，その名は見つからない。ギルランディオの代表作としては，多くの書物で，フィレンツェのサンタマリア，ノベラ寺の「聖母伝」の他，二，三の壁画が挙げられ，共通する評価は，初期ルネサンスでは無視出来ない芸術家であるが，写実的に流れすぎるか，通俗的である，とされている。確かに，システィン礼拝堂の彼の壁画をみても，ミケランジェロの大作の影に隠れ，霞んでいる。ベレンソンに至っては，彼は『凡庸な作家の域を出ず，絵画を大芸術たらしめるべきものに対する純粋な感情は殆んど持ち合わせていなかった』と酷評している。ベレンソンが何と言おうと，この作品はこの美術館では非常に大切にされている。それはこの部屋の警備員達の監視の目の鋭さからもすぐに解る。そしてこの女性はこの町の人々ばかりでなく，他国の多くの人々に愛されていることも間もなく知った。そんな人々の中に自分も加わってゆく。その気持もまた格別に嬉しい。あとになって，ベレンソンもギルランディオは『時として肖像画に，そのすぐれた才能を示している。そしてその最高潮のときには，彼はすでに凡庸の域を脱し………殆んど天才の域にまで近づいている』とも述べていることに気づいた。そして彼の言う肖像画こそが，ここのこの横向美人画であることは，氏自身がこの作品をギルランディオのものと断定した経過からも明らかである。

横向美人のことが初めて心にとまったのは確かフィレンツェのウフィツィでアントニオ・ポライオーロやピエロ・デル・フランチェスカのそれを見

た時であった。その当時はキリストに取材した諸作品にはまだ馴染めなかった。それらはいつも少し怖いと思うだけだった。それだけに一層これらの美人たちからは爽やかな印象を受けた。次にループルでピサネルロのそれ[2]を見て，その不思議な魅力に捕えられてしまった。彼女の鋭い目つきと蝶や花で飾られた幻想的な背景の対比，突き出たおでこと帽子，妙な衣服身体のアンバランス。これを美の典型，絵画の傑作とはどうしても信じられない。どこかのかたり屋みたいな学者か評論家が人に頼まれてこの絵を絶賛し，俗物か追従屋の弟子達が世に広めたに違いないと確信しつつその場を去った。ところが大部長いこと見ていたせいか，その絵がすっかり心に焼ついてしまって他の絵の入り込む余地が無くなってしまった。そしてその時不覚にも，芸術とは何なのだろう，などと自問してしまった。

先に挙げたギルランディオの婦人像の背景の壁に貼られた紙片に『絵が性格や精神を表現することが出来るとすれば，これより美しいものは無いだろう』という意味のラテン文字が書かれている。ピサネルロの横向美女からはその鋭い目を通して，怖れを知らない厳しい性格を，おだやかな口もとや全体のやさしい雰囲気から，一種の優雅な気質を，服装などからは高貴さを感じとれる。同じくベルリーンで見たかの有名なベネチアーノ[3]の美婦人からは，静寂，静粛，清潔などと文字を並べたてたくなる程の梵々とした上品さ，高尚さが感得される。逆にこの作品とは対照的なのは，シャンチリーにあるコシモ[4]の肖像画であろう。それを見る人の目は，宝石を散りばめた彼女の髪飾り，顔，生きた蛇のネックレス，露わな乳房へと次々に移り，その度に驚嘆が全身をよぎる。何という大担な女性だろう。誰しもが彼女の並はづれた精神のことを想うだろう。とにかくこの三作品は横向美人というものへの関心を特別なものにさせた絵であった。

しかし，その顔貌の美しさに酔ったのはプレディス[5]の「婦人像」であった。真珠のヘアネットを初め，身にまとっている華美をつくした装飾具に

決して負けない顔容，特に唇の赤が鮮烈だった。モデルがロドヴィコ・スフォルッァ夫人という説とベアートリーチェ・デステであるとの二説があって，後の説がよりなじまれているという。若くしてこの世を去った薄幸の美人と噂されたこの女性の方が，この絵に相応しいと思う人が多いという。またこの絵の作者について，プレディス説の他，彼とレオナルドの合作説，ロレンッォ・コスタ説，レオナルド単独説があって，最後者説が，学者達の否定的意見が多いにも拘らず，非常に根強い支持を受けているという。鑑賞者にとっては，特にそれがお気に入りの作品である場合には，正確な作者を知ることなどどうでも良いのだろう。むしろ自分の贔屓の作家であるのが一番望ましいわけだ。もう一つモデル問題で有名な横向女性画⑥がある。上の作品と同じくミラノのアンブロジアナ美術館で見たものだが作者はレオナルドである。これはモデルが作家を求めた例である。マントーヴァ侯爵夫人イザベラ・デステはレオナルドの画才に一目惚れし，一年間あとを追いかけてこのデッサンを描かせ，さらに4年間ねばってその作品への着色を頼んだが，適えられなかったと言われている。この才気走った，しつこい性格の女性を，レオナルドはかなりおとなしく，むしろ純情そうに素描している。そのように描くことは彼女の注文だったのかも知れないが，またそれがいやでレオナルドは着色を拒んだのかも知れない。

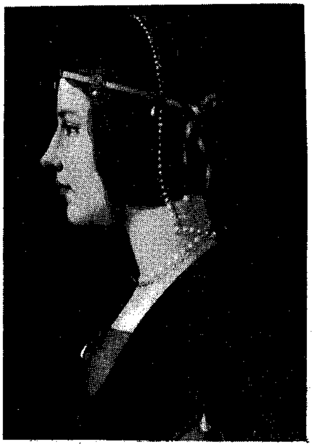
これまで挙げてきた女性達は皆美しく上品であった。だがすべて貴族の女性が描かれたものであって，所詮われわれには高嶺の花にすぎない。これに反して，美人とは決して言えないが，庶民的でとても好感がもてるのは，フランクフルトで会ったボッティチェリーの横向娘⑦とダヴィンチのもう一つの横向少女の絵⑧である。先の絵では，溢れるばかりに編み込まれた結髪や木綿地の着衣を通して，田舎娘の純情素朴さがやさしく伝わり，後の絵では，笑顔のポーズばかりでなく，飾りのない髪型さえも，その当時のものとしてはめずらしく，彼女の無邪気で可憐というよりはむしろ，天

1) Domenico Ghirlandio (1449-1494)
ジオバンナ・トルナブオーニの肖像
Sammlung Thyssen, Lugano (スイス)

2) Pisanello (活動期 1430-1455)
エステ家の王女
Musée du Louvre, Paris (フランス)

3) Domenico Voneziano (1400-1461)
(Antonio del Pollaiuolo, 1429-1498 説もある)
ある若い貴婦人の肖像
Gemäldegalerie Berlin, Berlin (西ドイツ)

4) Piero di Cosimo (1462-1521)
シモネッタ ベスプシーのプロフイル
Musée Condé, Chantilly (フランス)



5) Ambrogio da Predis (1455-1508)
ベアートリーチェ・デステ
Ambrosiana, Milano (イタリア)

6) Leonardo da Vinci (1452-1519)
イサベラ・デステ
Musée du Louvre, Paris (フランス)

7) Sandro Botticelli (1444-1510)
婦人像(シモネッタ・ベスプシー?)
Stadtliche Galerie. Frankfult a/m
(西ドイツ)

8) Leonardo da Vinci. (1452-1519)
ある少女のカリカチュア
Ambrosiana, Milano (イタリア)

心爛漫といった性格が表出されていて気持が良い。ミラノのポルディ・ペッツォリー美術館のピェロ・ポラアイオーロの若い少女も貴族的な装いの割には庶民的な顔だちで親しみ易い。このような女性達となら，いつもそばにいて，身近なことや故郷のことなどいつまでも話し合っていたい気がする。

横向美人画を見ているうちに妙なことに気づいてきた。日本の絵には古来横向のポーズは殆んとないが，ギリシア，エジプト，インドなどの絵には，それが非常に多い。このことについて，E. H. ゴンブリッチは，エジプトでは人体を描く場合には，頭と腕と足は側面から，目と両肩と胸は正面から見たように描くことがきびしく約束させられていたが，それはその方が見る者にわかり易いというほか，魔術的な目的に何らかの関係があったと指摘している。それはそれで一応理解出来るとしても，次にルネサンス時代の初期のフィレンツェ派に集中的に復活したり，近世，近代ヨーロッパ絵画史の中でも，新しい芸術運動が起る度毎に，その派の指導的，あるいは代表的な作家が，優れた横向肖像画を描いているのにつき当るのも不思議である。印象派，野獣派，立体派，象徴主義，表現主義等の先駆的な作家には必ずといって良い程それがある。特にピカソやルドンには多い。そしてそれらの作品はその派や画家の特徴を色濃く出している。さらにひとつの問題が加わる。各派とも盛期になると横向イメージがいつしか一掃されてしまう。フィレンツェ派に例をとるとミケランジェロ，ラァファエルには横向の構図が全く見られず，逆に横以外のあらゆる方面から人間が描かれている。ついでにもうひとつ。盛時が過ぎると横向像は急に写実的になるか通俗的になり，メダルのデザインや影絵になってしまう。近年では，ポスターや切手のデザイン，グラフィクデザインなどにも用いられている。人目を引くのには利用されるが，芸術性は皆無になる。

ここまで考えると，横向肖像画の系譜について体系的に考察してみよう

かなどという考えが柄にもなく，つい頭に浮びあがってくる。しかしながら研究などという言葉を元来好まないし，かってブリューゲルやゴヤを集中的に見たり，ドイツ表現主義のキルッシナーやココシュカに関心を持って問題点を整理しようとした時もついに研究には至らなかった。その際構図とか題材とか作家の生活史とか，彼の生きた時代思潮史とかを調べようとしたり，美意識とか情念とかいう言葉を借りてきて何とか作家の創造の精神に近づこうとしたが無駄だった。調べたことに対する理解は得られたがそれを見た時，心が受けたものは何一つ明らかにされない。絵の前に立った時，絵が我々を引っ張る強さの方が文章よりも常に強く，言葉が空しくみじめに見える。絵画論を書くためには本物の絵を見ない方がいいのではないかと本気になって考えたりもした。他人が書いた本を読んでも同じことが起ることが多い。作品の前に立った時，あんなに心の中がガタガタ鳴ったのに，その秘密について何ら糸口を与えてくれない。本によっては，ある程度の知識を与えつつ，同時に見事に感動を消し去ってくれるものもある。

それでも芸術作品の研究ということについて気になることがある。当然この横向肖像画に関してである。横向像を数多く手がけたピサネルロの絵をみているうちにひとつの作品にぶっつかった。彼の「聖の幻想」という絵には人物の他，馬，鹿，あひる，孔雀などすべて真横から描いている。一般に動物を描く場合にはそうなるという程度を越えている。どうやら意識して描いたらしい。次に同じ作家の「聖ジョーヂとトレビリオントの女王」を見る。そこには，真正面から見た人物と馬，真横からみた人物，真後から見た馬，その他が描かれている。これも横に対する前，後をかなり意識して描いたと見る。ヴィットコウアー兄弟の著書「数奇な芸術家たち」によると，初期ルネサンス期の芸術家達は，自然研究と並んで古代の絵画の研究をさかんに行ったという。当然上に挙げた人達の多くがこれら

の芸術家達の中に入っているし，さらに画家では横向画家的イメージを多く持っているウッチエロ，フラ・アンジェリコ，ヴェネチアーノ等もこの中に入る。その際彼らは，ギリシア時代の如く身分の低い単なる技術職人に終ることなく，構図の法則，人体の機構に精通すべく幾何学や光学や遠近法を学び取り，やがては“魂の動き”を“身体の動き”によって表わすことが出来るようになり，最高の目標である創意をわがものにしようとしたらしい。すなわち“神の力を含んでいる絵画”を研究しつつ，それを再創造し，視覚芸術を学芸の水準に高めることを目差した訳である。そのために横向画の研究が彼等にとってどれ程効果的であったかは，知る由もない。しかし芸術の研究は，どうやら創造活動を前提にしてきたこれらの人達には成功であったことは，彼等の多数の作品ですでに証明されている。

結局，横向の肖像画を見て，しかも恣意的に選んだ女性の肖像画だけをとってみても，さまざまな問題が出てくる。しかし問題を作りながら，敢えてその解決をためらいつつ，ただ鑑賞の対象を拡げてゆくという方法がありはしないだろうか。かたくなに横向美人だけを見ようという意志を持ってヨーロッパの美術館をめぐり歩いてみた。途中ブリューゲルの横向老婆に出会って面喰ったり，魑魅魍魎が暗躍するボッシュの絵の中に横向像を見つけて，砂漠のオアシスを感じ，ホットしたりもした。多数の絵の中から少数の絵を見つけてゆこうとする意志は，いつの間にか多くの絵を見てしまうという結果になった。ただいつの間にか美を考えることから抜け出て，美を楽しむことが出来るようになってきた。「学問ある者にとっても無いものにとっても楽しいものである」筈の絵画の鑑賞の仕方には，先ず，適当な絵画のモチーフを定め，それを追い求める——という方法があるものだという極めて独善的な結論に達した。

参　考　文　献

1. 「ルネッサンスのイタリア画家」B. ベレンソン著，矢代幸雄監修，新潮社 昭和36年。
2. 「美術の歩み」上，ゴンブリッチ著，友部直訳，美術出版社，1974。
3. 「数奇な芸術家たち」R. ウィットコウアー，M. ウィットコウアー共著，中村義宗，清水忠共訳，岩崎美術社，1973。
4. Die Malerei aller Zeiten. Rheingauer Verlag Gesellschaft Eltville am Rhein 1977.
5. Leonard da vinci und seine Zeit, Emil Vollmer Verlag Wiesbaden 1965.
6. Pisanello. Classici dell' Arte 56. Rizzdi Editore. Milano. 1966.
7. Giorgio Vasari. Lebensläufe der berümtesten Maler, Bildhauer und Architekten. Mannesse Verlag, 1974.

（7月11日受理）